

第18回福岡教育大学教育を考えるシンポジウム

「学校の危機」－不登校－

講 師：たけうちクリニック院長

竹 内 小 代 美

心理教育カウンセリングルーム『ふおーらむ北辰』主宰

中 光 雅 紀

司 会：福岡教育大学保健管理センター所長

宮 田 正 和

主 催：福岡教育大学

共 催：宗 像 市

連絡先：福岡教育大学保健管理センター

日 時：平成14年11月15日（金） 午前10時20分～11時50分

会 場：福岡教育大学 教育実践総合センター



教育を考えるシンポジウム

「学校の危機」－不登校－

レ ジ ュ メ

I. 「不登校」は、登校をもって解決とみなす？

- ・引きこもりのきっかけ 「不登校」が68.8% (『社会的ひきこもり』斎藤環)

II. アイデンティティの未構築による彷徨える存在

- ・押し付けられたセルフイメージ(自己像)と自己との乖離
- ・自尊心の崩落

III. 学校の危機、家庭の危機 ～その存在意義は～

- ・家庭からの〇〇〇，そして居場所へ
- ・活かされてこそ，癒される

不登校に対する教職員の問題意識（講演会アンケートより）

- ❖ よりよい声かけとタイミングがわからない。
- ❖ 集団生活の中でその子をどう活かしていくべきかわからない。
- ❖ 上の兄弟が行っていないことを理由に行かない子の対応がわからない。
- ❖ 一人一人にじっくり関わる時間が取れない。忙しすぎる。
- ❖ 小学生の場合、なかなか言葉で伝えてもらいにくい。
- ❖ 教師はカウンセリングの研修を受けていないから、対応できない。
- ❖ 保護者とのコミュニケーションがうまく取れない。
- ❖ 親子間で問題がある場合、学校としてどうかかわればいいのかわからない。
- ❖ 担任まかせになり、職員全体が共通認識を持つまでに至らない。
- ❖ 周囲の生徒とのかかわりをどう作ればよいかわからない。
- ❖ どんな目的を持たせたらよいかわからない。
- ❖ 「学校には行かなければならない」という固定観念にとらわれてしまう。
- ❖ 「無理をさせなくていい」という考えから、接し方が希薄になる。
- ❖ 自宅に訪問したほうがいいのか見極めができない。
- ❖ 病気なのかそうでないのかが見極められない。
- ❖ 子どもの悩みがつかめない。
- ❖ 保健室登校の生徒の要望（化粧品、ゲームなど）をどこまで許していいのか。
- ❖ 親の意識をどう改めさせるかがわからない。
- ❖ 不登校の前兆と思われる要因を知りたい。
- ❖ 部屋に閉じこもることで得られるものは？ 何を求めているのか。
- ❖ 目的意識をもった主体性を育てるにはどうすればいいのか。
- ❖ カウンセラーやフリースクールに行くことを教師として進めるべきか。
- ❖ 教師がやっていいこと、やってはいけないことは？
- ❖ 自宅訪問しても日常会話で終わってしまい、登校の話ができないでいる。
- ❖ 保護者に対しての助言の仕方は？
- ❖ フリースクールでは、何を子どもたちに身につけさせるのか。
- ❖ フリースクールに通う子どもたちは、学校に対してどのような印象をもっているのか。
- ❖ 家庭教育力をどのようにつけていけばよいか。
- ❖ 集団不適應の子にどうやって社会性を育てるのがわからない。
- ❖ 保護者に無責任と思われたくないから、フリースクールを勧められない。

です。中光先生はもともと経済学を学ばれまして、税理士事務所に勤務されまして、いろいろなことをされていらっしゃったのですが、その中で社員の行動革新プログラムのトレーナーとして、産業カウンセラーとかされています。それから1989年に「インターブレインコーポレーション」というのを創設されまして、教育研修・教育教材販売・コンサルティングの業務をされる中で多くの不登校の児童と出会われまして、心理教育カウンセリングルーム「ふおーらむ北辰」を創設され主宰されました。北辰というのは北極星という意味です。北のほうに輝く星をイメージされて創られたと言うことです。

それとまた現在は、大野城市総合福祉センターの引きこもり相談窓口でカウンセラーもされております。現場でのいろいろな体験の中からのお話ということになります。それではよろしくお願いします。

中光先生：

こんにちは。私はモニターはありませんので座って話をさせていただきます。

手元にレジユメがございますので、そちらの方を見ていただいてですね。今日は時間が通常の私がやっておりますカウンセリングの三分の一の時間しかありませんのでどこまでお話できるかわかりませんが、今日はできるだけ学生の皆さんに、私が普段、不登校・引きこもりの青年、ご家族と接して、現場でどういう状況があるのかということをしてできるだけ現場からの話をさせていただければと思います。

パネリスト中光先生の紹介

宮田先生：

竹内先生ありがとうございました。

ご質問もあるかと思いますが、後でまとめてご質問は受けていきたいと思います。

続きまして、中光先生をご紹介します。中光雅紀先生です。中光先生もユニークな経歴をお持ちの方



時間の関係もありますので早口になろうかと思いますが、また解かりにくいところは後で質問してください。

不登校に対する教職員の問題意識

それではレジュメの最初、裏の方にですね「不登校に対する教職員の問題意識」とありまして、ずらっと載せております。これはですね、私が昨年度から地元の、私は大野城市というところで相談室をやっておりますけれども、筑紫地区四市一町の教育委員会主催のですね、教職員・行政職員対象にした研究会が昨年度から行われておるんですが、その中で不登校の分科会の講師としてお招きいただいて、昨年・今年と先生方を対象とした講演をやったとき、先生方に是非アンケートをとということでアンケートを記入していただいたその一部です。代表的な先生方の、現場の今現職の先生方が不登校に対して持っている問題意識、疑問、質問そういったものの一部ですので、まあ帰られてからでも目を通しておいってください。ここにおられる学生の皆さん方は、将来教員を目指しておられる方と言うことですので、現在今、不登校児等の対応をしている現場の先生方がどういう認識でおられるのかということの参考にしてください。

このテーマについては今日は時間を取れないんですが、ちょっと言いますとですね、現職の先生方も不登校児童、それから我々みたいな民間のフリースクールに対する認識がですね、残念ながら非常に低いです。この不登校はまあ減らないと思います。現場から言ってどんどん増えるでしょう。学生さん方もこれから教員になったら必ずそういう不登校の子どもさんに対応することになると思いますので、皆さんこれから先生になられるでしょうから、できるだけですね事前の予備知識を充分入れていただいて現場に出る、ということがよろしいと思います。じゃあ帰って読まれてください。

不登校の解決は登校？

じゃあ、レジュメにそってお話します。

最初に「不登校は」登校をもって解決とみなす？としております。これはどういうことかと申します

と、当然その「不登校」が学校に行っていないということで、「不登校児童」、以前は「登校拒否」とかまあ非常に過激な言葉もありましたけれどもね。不登校、学校に行かないということで「不登校児童」ということになっていきますけれども、じゃあ不登校児童が抱えている問題は、学校に行かないことなのか？ということですね。これはどういうことかと言いますと、学校に行かないことが問題であれば学校に戻れば問題解決ですよ。でもそこで問題解決になっているかどうかということなんですけれどもね。

引きこもりの増加

今私のところでは年齢的に言いますと、15歳から35歳までの青少年たちに対応させていただいています。もともと私が相談室を開いた当初は、圧倒的に不登校児童のご相談が多かったのですが、今は圧倒的に引きこもりです。私どもNPOも運営しているんですが、定例で3、4カ月に一回の割合で相談会等を開催しておりますけど、だんだん年齢が高くなってきています。

前は39歳の引きこもりの相談がありました。お父様が来られましたけれどもね。もう白髪です。もう大分ご高齢ということです。私のところに相談に来られているのは10年を越す引きこもりですね。だんだん増えてきて、最近は女性も増えてきています。親の会、引きこもり親の会とかいうのもありましてね、そういったところでデータを取りますと圧倒的に男性が多いと。7割方が男で女性は3割とされているんですが、現場の感覚から言いますと半々いるだろうと思われます。ただ女性の場合目立ちませんのでね、男性よりね。要は家にいても「家事手伝い」とか言っていれば、まあ一応それですむでしょ？ 男性はちょっとね、そういう訳いきませんから。だから表に出なかったということですね。でもまあ困ったという状況は男も女も変わりませんので、女性の、お嬢ちゃんが、娘さんがそういう状況に至ってご相談に来られるご家庭がボチボチ出て来たということです。特に18歳以上ともなりますと行政でも民間でも対応する施設がほとんどがありませんので、私のところに集中してるというんですかね、他県からの相談も増えております。

その青年たちがですね、やはり今までに不登校を

経験していることが多いんですよ。20代30代になって引きこもりが5年だ10年といってうちに来られてですね、「小学校・中学校で不登校の経験がありますか？」と言うと「ハイあります」ということが非常に多いんですね。ですから問題は解決していなかったということなんです。だから学校に行かないことを問題と捉えれば先ほど言ったように学校にもどれば問題解決。

不登校さえもできない子どもたち

でも中には不登校さえできない子もいるんです。解かります？ 精神状態はもう学校行きたくないのですが、不登校すら出来ない子もいる。こういうケースもありました。小学校のですね、4年生でしたかね、女の子です。小学校4年生のお母さんが相談に来られました。その子是不登校してないんですね。ところがお母さんがある時、買い物の途中学校のそばへ行った。そうすると娘さんがですね、校庭の中でちょうどいましてね。それに気付きて、何かこう喋っているんですよ。それで、ちょうど大きな木がありましてね、そこで喋っていて、お母さんこう見て、ああ友だちと何か喋ってるんだな、ということでお母さんそのまま帰って、夕方お嬢ちゃん帰ってきたらね、「今日お母さん買い物の途中そば寄ったんだよ。何かお友だちと喋ってたね」と。お嬢ちゃんなんと言ったと思います？「うん、木と喋ってたの」でお母さん、えっと思ってね、「えっ？木と喋ってたの？」「うん、いつもそう」「どういうこと？」って言ったら「うん、だって私、友だちいないもん」ということでよくよく聞いたらすね、その子いつもですね、休み時間となると図書館に行ったり、校庭にでた時は校庭に木があってその木と喋っているような状態で、お母さん初めてそれに気付いてね、で、びっくりして相談に来たんですけれど。

だから不登校もできない状態、できない性格の子もいるということで、あまり学校に行く、行かないというその部分にこだわってしまうと子どもたちの叫びが聞こえてこない、気付かないということがあります。

メッセージとしての不登校や引きこもり

ですから不登校にしても引きこもりにしてもそういう行動というのはですね、何らかのメッセージを含んでいるんだということをそう捉えてほしいですね。先程先生の方から、生理学的に詳しくお話があったんで、私も非常に勉強になりましたけれどもね、やはり人間の体というのは非常に正直ですね。ですから、心の状態を見事に反映しているといえますか、だから頭が痛くなる、お腹が痛くなる、全て何らかのメッセージだという風に受け止めていただいて、子どもが学校に行けない状態になった時、子どもは何を訴えようとしているのか。ですから学校に行く行かないにこだわりますとね、

学校に無理やり連れて行くというような結果になっちゃいます。

私のところのご相談に同じようなことがありましたけれども、中学2年生の男の子がね、学校に行かなくなってしまっ、中学ともなりますと高校受験のこともありますので、尚更親御さんは必死になります。それでそのお父さん「何言ってやがるんだい」って感じで。無理やり自分の車に乗せて校門まで連れて行って、先生方に事前に電話しておいてね、担任の先生と生活指導の先生に来ていただいて、そこから教室に「もう引きずってでもいいですから、どうぞ私が父親ですから、責任持ちますから引きずってでもいいですから、教室まで連れて行ってください」と先生方に頼んだわけですね。先生方も素直な先生で、そのまんま、その通りされたんですね。そして教室までのね、廊下を、他の教室の子も皆見て



るんですよ、ずるずるずるずると引っ張っていったわけですね。程なく引きこもりましたね、その子ね。あたりまえの話ですね。

学業よりも大事なものの

ですから何度も申し上げますように、学校に行く行かないだけを問題と捉えるべきではないということです。何が問題か？ そのお子さんの状況によっては今は学校に行かなくても解決しなければならない問題があるんだったら、学業よりもそちらを優先すべきです。その証拠にですね、私のところに相談に来た場合は当然最初はお子さんのね、学校で何があったか？と言うようなことを伺いますけれども、まあそれだけで終わることはまずないですね。どうということかと言いますと、両親間の問題。いわゆる夫婦仲の問題であるとか、家の中でたとえば、お姑さんなんかと同居している場合は、嫁・姑の問題ですとかそういった問題がほとんど出てきますね。そういったものの影響も受けて、子どもの非日常的な逸脱的行動が出て来ているというふうに考えていただいたらいいかと思います。

私がよく普段ですね、親御さん方にお話する事で、我々の行動は常に何かの欲求に突き動かされて行動してるかと思うんですが、その欲求を自分が意識して、素直に表現できている時というのは要求という形で出しますよね。自分でも意識できている欲求はちゃんと口に出したり、メールで送ったり、手段はいろいろですが、とにかく自分の欲求を満たすためにそれを自分がはっきり意識している時には自分以外の人間に要求ということで示しますよね。でも人間自分の欲求を全て意識できているわけではないんですね。無意識の中で、何かを求めている時もあります。その時には結局要求という形では出せませんので、どういう形で出すかというと、「症状」という形で出すんですね。頭が痛いとかおなか痛いか。

本人もわからない不登校の理由

たとえば皆さん学生さんだから若いから、恋愛感情なんかでもね。ある日誰々さんがA君の顔を見たらドキドキしました、と何かしら？というようなものでね。まだ表面意識では好きとか嫌いとかないん



だけどね。何かある時を境に胸がドキドキしてきた、無意識的に求めているわけです、A君をね。だからそれと一緒にね、不登校の子どもたちも何らかの欲求があってそれが満たされないがために行動がおかしくなってきたわけですけど。だから自分でも解からないからこそ症状といったような形で出てくる。だから、そういう子に「何で行かないの？」とか「どうして引きこもっているの？」と言っても本人も解からないと言うんですね。言いたくないという時もありますけれども、本当に自分でも解からないこともあるということです。

何が問題か

ですから、まずは不登校の問題を考える時にですね、やはり何を問題とするかということここが今一番大事だと思います。

引きこもりの場合もそうです。一体全体何を問題としているのか？ 本人もそうですがご家族でもありますね。部屋から出してもらいたいのかね、私はいつもカウンセラーとして聞きますけれども、「私に何を期待しますか？」と。「部屋から出してほしいですか？ それとも社会に出してほしいですか？ どっちですか？」。中にはですね、10年越した子どもがもう30過ぎますとですね、「とにかく部屋から出てきてくれればいいです」という親御さんもいるんですね。社会にどうこうではなくてね。そうしますと部屋から出すのにも苦労はありますが部屋から出たところで満足して、「お蔭さまで出ました。ありがとうございます」ということで満足されるご家庭もあります。私は疑問を残しながら去って行くわ

けですけどね、もうそれで解決かな？と思うんですけど。でもその親御さんは部屋から出る出ないを問題と捉えていますから、それでいいんです。その親御さんにとってはね。親御さんはいいでしょうけど本人はたまったもんじゃありませんね。

ですから不登校にしても引きこもりにしてもです、とにかく何を問題とするか？というところです。まずそこを重要視していただきたいということです。

アイデンティティのできていない子ども達

では次にいきます。アイデンティティの未構築による彷徨える存在。ここはですね、先程先生のお話の中でもいくつかありましたけれども、うちに来ている青年たちに共通して言えるのは、自尊心が保たれていないとか、もうズタズタに壊れちゃってる青年たちばかりですね。自己否定ですね。自己否定のかたまり。自己否定してますから親を罵るんですね。解かります？ 自分が好きじゃないから。皆さんどうですか？ 皆さん若いですけど。自分のこと好きですか？ 大好きって言えます？ 私ね、自分のこと大好きなんです。家内からよく言われるんですが、「あんた、自分のこと一番好きでしょ？」って言われるんです。「何が悪いんだよ」って言うんです。「あんた、自分の子どもより自分のこと好きでしょ？」って言うんですね。私ね、大好きなんです、ほんとに。

家にもね、皆さんと同じ位の21の娘がいるんです。その娘にも言うんですよ、自分を好きになれと。造作はどうでもいいと。とにかく自尊心がね、やっぱり保たれてない。その自尊心がね、結局私よく言うんですけど、親や教師がね、子どもたちの自尊心を剥ぎ落とす元凶になっているんですよ。

学校でもね、子どもたちの自尊心をことごとく潰してしまったりね、家庭の中でも子どもの自尊心をポキンと折っちゃったりとかね、そういうことを知らず知らずですよ。もちろん先生方も悪意を持って意図的にする先生はいません。親もそうです。子どもは可愛いですから。ただ結果的に、子どもたちの自尊心を崩してしまっているということが多いんですね。自分というものを認められないんで、その自分を生んだ親に攻撃の矛先がいくんです。だから100%とっていいほどうちに来る青年たちで、自分の

親を尊敬というようなことを言う子はいませんね。その逆ですね。罵ります。「そこまで言うか親のことを」と言う位です。

それは一つには自分自身を肯定できてないから、その肯定できてない自分を自分の存在を、存在と在らしめた親を攻撃するしかないんです。「何で私を生んだの？」と。「何でお母さんあんなお父さんと一緒になったの？」と。「早くいい加減別れなさいよ」とかね。そんな感じでね。それは半分は本気、半分は自分を認めてやれないから、そこから来てるんですね。

それから不登校にしても引きこもりにしても子どもたちがもとの状態に戻るためには、自尊心の回復ということがも一つ必要ですね。その中でね、アイデンティティと言う言葉がありますけれども。自己同一性とかね、自己存在意義とかいろいろ訳し方あるでしょうけど、アイデンティティが充分確立されていない子が多いですね。いわゆる自分らしさというもの、最近の若い人というのは個性的ですけどね。ともすると個性的な格好はしていますが、皆で共通した格好をしてるんですね。ルーズソックスとかね、鼻ピアスとか臍ピアスとかね。家も高校生の娘もいるんでね、18の子もいるんでね、ルーズソックスとかね、どうも私には理解できないんですけどね。「わっ汚いなあ」って感じでね。「他がルーズソックス履くならおまえ腹巻ぐらいしろよ」って言う位ね。「横並びで一緒ではつまらんだろう」ってね。「おしゃれって思ってるかも知れないけど、人がせんようなことをしろ」ってね。「バカボンのパパみたいな格好でもいいからね、その方が個性的だろう」って言うんですけども。どうしても自分らしさというのが今の若い人たちというのは個性的には見えるんですけど、何かないような気がしますね。ですから脆いんですね。ストレス耐性が育ってないとか。自分っていうものを、自分らしさと言うものを持っていませんので、外部からのストレスに対して非常に弱い。

一つには、その子どもたちが自分らしさ、自分のアイデンティティが確立できていない要素というのはですね、家の中で男の子でしたら、ここ男性いますね。男性の場合は当然ながら、目の前に将来の自分、大人の男性としては父親がいますね。そこで、この父親に正に自己同一化ができない。頼りないお

父さんがいたりね、くたびれたお父さんがいますとそこにもう重ねられないんですね。

女性の方はね、母親。やはりその生活にくたびれている母親が目の前にいますと、そこになかなか重ねられなかったりしてね。また言いたい放題のことを言う父親に対して、いつもかしづいてね、口答え一つもできない母親が目の前にいますと、重ねられないわけですね。私はあんな母親のような生き方はしたくない、てなもんでね。そうすると結局自分というその人格をつくる、構築する雛型がそばに無いもんですから、自然結局アイデンティティが確立されないまま肉体年齢だけとってるというケースがあるんですね。ですからそういう面では皆さんも何か尊敬できる対象、まあ一番いいのは両親を尊敬していただきたいんですけどね。それができなければ、大学の先生とかね、クラブの先輩とかね、歴史上の人物でも構いませんけどね。そういう自分の尊敬できる対象を持つことは、自分のアイデンティティを構築する上で非常に有益かと思います。

学校は評価と管理の場

学校という世界はですね。どうしても評価の世界ですよ。常に評価の目に晒さらされてますね。評価と管理ですよ。それが学校という世界です。それはもうしょうがないですよ。一つにはしょうがない。でも考えてみてください。皆さんも学生ですけどね、常に学校にいる間評価と管理の中で暮らしていたら、これはストレスがたまらない方が嘘でしょ。それで、常に評価の目に晒されるといえるのはどういうことかということですね、今のアイデンティティに関わるんですけどね、自分を評価してもらいたいというのが誰しもありますから、そうすると評価してもらうためには、自分のパーソナリティと違う自分を装よそおうということが必要になってくることもあるわけです。そうするといわゆる仮面かぶを被り出すわけですね。評価してもらわんがために仮面を被り出します。仮面の数が多くなってくるとですね。「あれっ、一体全体私はどこに行ったのかしら」ってなもんで自分というものが見えなくなってしまうんです。これがですね、学校の世界だけではなくて、実は家庭の中でもあるんです。家庭はじゃあ学校の評価と管理と言うことと対比して何かと言うと、査定と強制なんで

す。査定というのはボーナス査定の査定。世のお父さんたちはやはり、ボーナス査定を気にしながら日夜頑張っているわけですけどね。子どもたちも一緒なんですね。うちに帰ったら査定。先程先生のお話にもありました、結局我々親というのはですね、どうしても子どもたちに対してね、やっぱり期待があるんですよ。うちは息子はいませんけどね、男の子は残念ながらいませんけどね、俺の息子だからこうなってほしいとかね、私の娘だからこうなってほしいというのはどこの親もあるわけです。そして、ついついやっちゃいかんことなんですが、その期待があるがためにね、査定しちゃうんですよ。そして自分の期待に添った子だったら、ああイイ子。そして自分の期待に添わなかったら、イイ子っていうのがなかなか出てこないかもしれませんね。それが子どもにとっては査定なんですね。

そうすると子どもは当然ながらお父さんお母さんの愛情を勝ち取りたいと日夜闘争しているみたいなもんですね。兄弟がいる場合は兄弟はライバルですね。自分が兄ちゃんより私、妹より俺、つてな感じで、よりお父さんお母さんの愛情がほしい。要はお父さんお母さんの査定に充分ひっかかりたい。評価してもらいたい。そのために先程の学校と同じように自分を殺すんですよ。イイ子に限ってそうします。さっき先生のグラフにあったでしょう。

イイ子ほど不登校や引きこもりになりやすいですね。イイ子っていうのは親から見て、大人から見て、教師から見て、イイ子でしょ。イイ子っていうのはね。ということはどういうことかということ、大人の顔色見るのがうまい子ということになります。それに合わせるのがうまい子ということです。ということはもっと言うと、自分を殺すのがうまい子なんですね。いろんな仮面を被るんです。父親の前で、母親の前で、学校の先生の前で、巧妙にその仮面を使い分けるんですね。それで、最初はいいんですが、それが程なくくたびれてくるんですね。へとへとになって心が磨すり減る状態になって、気づいた時には自分という存在が見えなくなる、自分のアイデンティティが全く確立されて無い状態ですね。ですから子どもたちが学校に行けば評価・管理の中、家へ帰れば親からの査定。

それから強制。強制というのはいいですか？ 強制というのはですね。親が当然子どもを養育してま

すので、小さい時は「あれせい。これせい」と強制しがちになりますわね。それはまあ仕方が無いところもあります。しつけ上ですね。ただある程度の年齢になってくると無言の強制というのがあるんですよ。無言の強制。口にこそ出しません。でもその家の中での雰囲気、家風、家族神話という言い方もしていますが、その家独特の空気というのを醸し出しているんですね。その空気というのが無言の強制力として、子どもに重圧を掛けるんですね。

たとえばどういうことかという、こういう事例があります。

「うちはね。全てオープン。ボーイフレンドができてガールフレンドができて、何でもお父さんお母さんに言っていーよ。包み隠す必要はないからね」と常日頃から言ってるというご家族が来ましてね。そこはまあ、子どもさんが引きこもっちゃったわけですけどね。それを親御さんから聞いていて、「ああそうですか、それはいいですね」と。それで、引きこもってる子どもと話す機会があって、お父さんお母さんこういう事言ってたよ。「うちは何でもオープン。何でも言いなさい」と「いいお父さんお母さんじゃないか、あれほんとかい？」と。時々嘘を話す親もいますので。聞いたらね、「確かです。それは嘘じゃありません。間違いありません。でもですね」と言うんですね。それで、「何？」と言うと「口では言ってます。でも到底逆らえないんです。あの親たちには」要は、空気作ってるんです。逆らえないという、逆らっちゃだめよ。きりっこうね。口では「言いなさいよー」って言ってるけれど。それこそお母さんにね「ガールフレンドできたよ」って言うとな、|きっ!| ともう表情が違うわけです。口にこそ出さないけどね。表情で |何?| ってなことを。そこで、もう言えなくなっちゃうんですね、そういった無言の強制力が子どもに一番重圧を掛けちゃうわけですね。

ですから、そういった中で子どもたちというのはね、人知れず自尊心が崩れてきて、自分のパーソナリティの基になる、アイデンティティというのが構築されないままね、育っていく。そうするとアイデンティティが構築されずに育ちますとね、自分の評価基準というのを持ち得ないで育ったのと一緒なんですね。アイデンティティが確立されてないというのは。いろんな物を見て、自分で判断して行動しま

すけれど、その時に必ず自分なりの評価基準というものがありますね、ひとつのね。それが無いわけですよ。アイデンティティが確立されてないということは。そうするとどうなるか？ 周囲の評価基準で動くようになるんですね。だからくたびれてしまうんです。常に周囲、自分以外の人の評価基準に合わせて、八方美人的になっちゃうわけですね。ですから、くたくた状態になってしまうということです。そういう面でもアイデンティティの確立というのが重要になってきます。

時間ですので最後のところにいきますけれど。

学校の危機、家庭の危機～その存在意義は

まあ今回のテーマが学校の危機ということで承っておりますのでね、私最初にこの話しがきた時に、学校の危機もそうなんですけどね、それ以上にとにかく、それと同じくらい大事なことで家庭の危機が有ると。ですからここにある家庭からの〇〇〇、そして居場所へと、この〇〇〇って何かわかります？ わかる人？ クイズじゃないですけどね、家庭からのこれは避難所。“shelter” 学校が家庭からの避難所になってほしいんですね。もちろんね、こういう話しますとね、じゃあ家庭というのは今どこも大変でね、温かい家庭は無いのか？ とそうじゃないんですよ。温かい家庭もたくさんあるんですよ。でもいわゆる不登校や引きこもりになっている青年たちの家庭で言いますとね、正に彼等は避難所も失って、学校も避難所にならなかったということです。だから居場所の前に避難所なんです。

居場所というのは私はこういう風に定義付けています。自分という存在が確認できる場所、そして自分が活かせる場所、それが居場所。単なる空間ではなくて自分という自己存在が、自分自身ではっきり認識できて、自分というパーソナリティが活かされる場所を私は居場所と定義付けしています。だから今盛んにいろいろ居場所、居場所とか引きこもりの子どもたちの居場所とか言いますが、私はその前に避難所を作るべきだというようなことで言っています。

最後に私はいつもですね、最後に載せてますけれど、活かされてこそ癒されるというようなことで私自身それをポリシーとしてやっています。

だから私はカウンセラーという形でやっていますが、臨床現場のきちっとした資格の臨床心理士の先生であるとかね、という形ではなくて、先程紹介にもありましたが、会計事務所から、営業の経験もしてきた、そして今カウンセリングということでやっています関係で、あの決して一般のカウンセラーのような優しいカウンセラーではないと思います。

彼等に対して手厳しいことを言います。でもそれはね、その癒すという感覚がね、本人が生きていればね、傷は癒えますからね。イキイキとしてれば。だから私さっき言いましたけれども、自分が大好きって言いましたけれどもね、自分が大好きだったらね、滅多な事が起こってもそうそうダメージは受けないんですよ。活かされてるから。楽しいから、毎日がね。そういうことです。

時間ちょっと過ぎました。どうもありがとうございました。

